在ドイツ森林太郎あて書簡にみる帝国大学医科大学事情（その2）

岡田　靖雄

“（その1）”にあたる「在ドイツ森林太郎あて書簡にみる帝国大学医科大学事情」は2009年1月例会で報告した（抄録は，同年の本誌第55巻第4号に）．このときの資料は『日本からの手紙―日本近代文学館所蔵―滞独時代森鷗外宛1886–1888』（1983年，日本近代文学館・東京）で，今回の資料は『日本からの手紙〔文京区立森鷗外記念館所蔵〕滞独時代森鷗外宛1884–1886』（2018年，文京区立森鷗外記念館・東京）である．

これらの書簡は森林太郎が4冊の大判ノートに貼付・保存していたもので，その第1冊，第2冊は第1男森於菟が所蔵しており，かれが本郷図書館内森鷗外記念館に寄贈した遺品のなかにあった．第3冊，第4冊は時代や書店菰池佐一郎（世田谷区）が蒐集していた資料を日本近代文学館がゆずりうけたものであった．これら両者は同時に翻刻出版する合意が成立していたが，文京区立森鷗外記念館の作業が大幅におくれて，刊行順序が逆になった．

全体を通じて書き手の主役は，弟森篤次郎であるが，かれの東京大学医学部（→帝国大学医科大学）進学は1886年12月で，医科大学在学の期間はみじかいので，家族をのぞく林太郎周辺の人の動きもおった．

今回の『日本からの手紙』所載は，1884年7月から1886年6月にいたる151通．差し出し人は，家族で森静男（父，35通），篤次郎（弟，38通），キミ（妹，31通），潤三郎（弟，21通）（母ミネのものはない）．陸軍関係では，石黒忠悳（8通），石坂惟寛（4通），緒方惟準（1通），賀古鶴所（2通），小池正直（1通），谷口謙（1通）（林太郎の同級生30名中で陸軍入りしたのは，小池，江口襄，賀古，谷口，森など計7名）．篤次郎の同級生では呉秀三（1通），松田蔵雄（予備門時代，1通）．その他では佐藤元萇（林太郎の漢文の師，1通），斎藤勝寿（キミの漢学の師，1通）清水格亮（亀井家家令，1通），関澄桂子（キミの和歌などの師，2通），高野寛一郎（東亜医学校での林太郎門下，1通），米原綱善（藩校養老館塾長，1通）．内容をみても中心はやはり篤次郎で，その手紙は長文でくわしく，兄ににて噺好きで，また芝居の筋をくわしくかいている（のち歌舞伎評論家三木竹二）．

予備門－東京大学医学部－帝国大学医科大関係－賀古（85.3.9）三浦守治がドイツでDoktorexamをうけたが，おちたら大学の面目つぶれる，佐藤佐もうけていると．篤次郎（85.4.15）緒方正規脚気の原因発見の件，新聞に広告．篤次郎（85.7.1）同学生徒夏休みとって出席へる，プッチール，クロードの両教師は固執不動，出席しても2，3時間だけ．篤次郎（85.9.15）呉にあう，松田（天山）溺死をしている，呉同級生に松田への友誼の方法をとい，遺詩刻と決定．篤次郎（85.11.19）榊・青山鞘当て〔独逸日記9.25〕よんで絶倒．“青山ノ馬面何ゾ能ク色ヲコシラヘ能ハン”．篤次郎（85.12.3）同学70余名中昇級40人，30日予備門卒業式で呉答辞，9月より予備門大学を脱し大学教授が中学教師のようになるのでグロート辞職帰国，12.1医学部出校，小金井の解剖学各論はなはだ明了，弁もたつ．篤次郎（86.1.5）天山遺稿呉らの編集でなり，同級生に1部ずつ．篤次郎（86.6.11）小金井夫人死去，居宅は自分の下宿の筋向かい，小金井は容儀秀美で温顔，学校まで100歩を25分でいく．

林太郎周辺－賀古（85.3.9）橋本先生の殿様に閉口，高木兼寛天狗．石黒（85.6初旬）賀古を緒方につけ細菌説で．篤次郎（85.10.21）谷口傍若無人．小池（85.12.25）谷口は同級のものの出世は自分が口きいてやったなどいっている，どうしてあんなものを軍医本部にいれようとしたのか，

尿道疾患で重症だった賀古は青山榊の件きいて，病気になってはじめて心やすらいだと．

最後に森家事情について疑問．林太郎の独逸日記はあとからあまれたもので，自分にまずいことははぶいてある．林太郎書簡は森家で大事に保管されていたものを，おそらく林太郎自身が処分したのだろう．於菟はこの書簡集を家宝としていた．それなのに，日本近代文学館所蔵分はどうして古書店主の手にはいったのか．森鷗外研究者があまりふれたがらない森家内のくらい事情がそこにうかがえる．

（令和2年1月例会）

書　評

只見町教育委員会 著
『医家原田家書籍目録（只見町文化財調査報告書　第21集）』

本書は，福島県南会津郡只見町黒谷において江戸中期まで在村医家であった原田家（原田拓夫氏宅）に伝わる書籍目録とその解説である．

昭和期から刊行されている只見町の町史関連書籍は，1990年代以降も『只見町史』シリーズ・『只見町史資料集』シリーズ・『只見町文化財調査報告書』シリーズが刊行されている．各地の自治体史（県史・市史・町史・村史）事業の刊行物は，大きく分けて通史の部分と各種データや目録などの資料が収録された部分に分けられる場合が多いが，『只見町文化財調査報告書』シリーズは只見町史関連刊行物のなかの後者の部分に相当する．この『医家原田家書籍目録』はその第21集にあたり，平成26～27年度に行われた只見町黒谷の原田家の書籍調査によるものである．

本書はいわゆる文書・蔵書目録の類ではあるが，紹介者はいくつかの点から同書を紹介することに意義があると考えている．

在村医家研究書として

本書の構成は，大きく分けて解説部分の「医家原田家書籍解説」（約40ページ）と目録部分の「医家原田家書籍目録」（約230ページ），加えて撮影画像の収録されたDVDの付録からなっている．

まず，「医家原田家書籍解説」の内容から見てみよう．この部分は，次の10本の論考から成り立っている．

一　「只見本」古典籍と医家原田家書籍の文化資源としての価値
二　医家原田家の歴代
三　原田家の書籍目録
四　漢方医学史と原田家書籍の医書・薬書
五　漢学の知　―運気論・暦術・陰陽五行説・易・卜占・儒学・漢学―
六　只見本『神皇正統記』と瀧泉寺蔵［三宝院伝法灌頂私記　胎蔵界］
七　学僧印融が受けた長禄四年『伝法灯阿闍梨職位事』
八　職人巻物の形成とその背景
九　只見本『神道書五部書』の書写と考証の過程
十　原田家書籍の教訓書・教育書

江戸期の在村医家・医師の社会的役割から説き起こし，原田家の家系，歴代の活動，医学書・漢学書はじめとした様々な分野の蔵書とその社会的背景などにも筆が及んでいる．しかも，この部分は約40ページではあるが，本書は判型がA4と大きくしかも二段組みであることを勘案すると，通常書籍の100ページ以上にも相当する分量となっ